稻取水産株式會社鐵工部主任川浪四郎氏、同職工長小林幸三郎氏は共に鐵工組合の先輩として相識なればこの同所に一時を忍ばん方針なりしも東京に於ける撿舉の手猛裂なりしためと、川浪氏の勸說とに依り、自首するに決し、廿日に悠々伊豆の舊蹟を巡遊し同夜汽船に乘り廿一日靈岸島着直に友愛會本部に到れり、友愛會にては之に惜別の情を表すべく折柄居合せたる棚橋、松岡兩氏初め十數名の有志にて本部前玉川にて別盃を揚げ、一同之を護りて警視廳に自首せしめたり。當局は取調の結果、左記三十名を有罪とし騷擾罪の名の下に何れも起訴收監されたり。

泉忠　川崎甚一　石居幸藏　望月源治　谷風登　藤木寅之助　黑羽眞一郎　伊藤廣治　永井嘉久治
西澤義近　幸松夫　井坂敬　小林吉太郎　横山三之助　小田太一　小山內寅次郎　工藤忠治　山田
潤吉　大橋定吉　正木利章　細谷甚之助　小島平三郎　加藤留男　井口清太郎　富田秀夫　小林伊
三郎　小林御代治　青野雅雄　中村森之助　藤田房一　以上三十名

△收監者に對する組合側の態度

勞働組合にては足立事件の犯人を目して一樣に是を犧牲者とし、泉忠外二十九名に深重なる同情を表したり、友愛會東京聯合會にては、幹部會を開き協議の結果、三十名の收監者に對し九百圓の豫算を以て差入れをなすに決し、更に泉忠の家族の扶養は東京鐵工組合に於て是を保證したり。

友愛會以外の勞働團體に於ても、泉外二十九名のため義捐金を募集し、其額月ならずして千圓を超過したりと言ふ。

足立事件は何等訓練なき職工の間に、一人のサンヂカリストの混じだる結果として遂にかゝる異常なる結果を見たりしは注目の價値あり（大正十年一月三十一日）

（補遺）　東京鐵工組合にては足立支部の暴行職工等の收監せられしに對し義捐金を募集のため左の檄を普く勞働者に配布せり。

足立の犧牲者を救へ!!!　（原文の儘）

府下南葛飾郡吾嬬請地足立製作所職工九十餘名が一月六日工場を閉鎖せられ、爾來團結して復職交渉中、工場主足立泰治の橫暴慘虐なる處置に憤慨し、一月十二日夜四十餘名は遂に全工場に闖入し、工場を破壞し全部騷擾の罪に問はれ、東京監獄に收監せられたるは、新聞紙の報ずる處によりて御承知の事と信ず。抑も全工場は俗に鬼工場と稱せられ、勞働條件は惡劣に職工の待遇は大正の今日に有り得べからざる苛酷慘虐を極め、工場主は常に之を誇りとして資本家の集會等に於て、自己工場の職工待遇法を廣告しつゝありたり。然るに大正九年十二月中本組合員泉忠氏が全工場に入職するや盛んに職工の自覺を促し資本家が勞働者を侮辱するは勞働者間に組合團結なきが爲めなりと爲し組合組織の運動を爲したる爲め忽ち工場主の赫怒を買ひ十二月二十九日何等の理由なく解雇を申渡されたり。越へて一月六日の始業日に至り職工は工場に出勤したるに兼て職工間の鬱勃たる不平に恐を抱き居たる工場主は事業の都合上當分休業すると稱し工場を閉鎖し解雇を宣せり。依て職工等は委員を擧げ再三工場主に復職を迫れども斷乎として應ぜず。職工等は已むを得ず退職と決し再び委員を擧げて退職手當の請求を爲したるに橫暴なる工場主は言下に「一文も出す能はず」と刎れ付けたり。職工等は此上は法廷に訴へて是非を決すべしとて一旦解散したれども工場主の橫暴慘虐に對する鬱積せ